

# 「しかたがない」 をもうやめよう 京都ラブ・ストーリー



デーヴィット・クビアク  
(David KUBIAK)

## 京都に移り住んだころ

恋人と私がはじめて京都に移ってきたのは、長雨がちな、なまめかしい新緑の春のさなかにあつた一九七〇年のことでした。

私たち二人は、韓国の片田舎にあつた平和部隊をちょうどやめたところで、合衆国政府からの給与支払い（二年間の仕事にたいして総額一二〇〇ドル）を待っていました。しかしそれは合衆国政府のこと、四ヶ月近くも待たねばなりませんでした。また、日本は信じられないほどの物入りで、ほんとうにひもじいと思いました。

でもまた、私たちは京都にいたために、そんなことは気にもとめませんでした。私たちはやはり、根源的なシンプルさやアジアの農村的な価値を信じていましたし、まったく京都の感覚

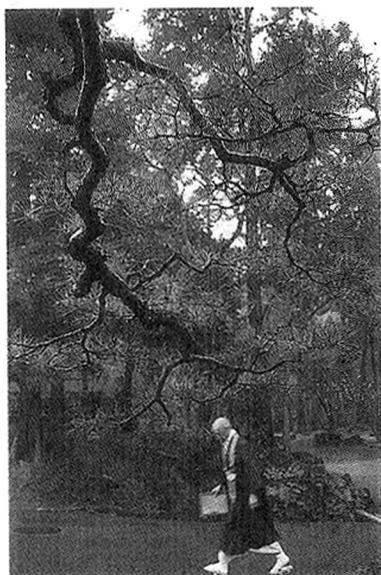
的な美に心を奪われていました。もちろん、時は春でしたし、私たちも若く、世界のなかでもつともロマンティックな街で恋におちていました。

私たちは質素に、ほんとうに質素に生活することを学びましたが、でもいくぶんは、とても豊かで幸運だと感じました。生きるために、山の泉の水を飲み、パンの耳やデパートの試食食品といったダイエット食をたべ、東山の苔のベッドを愛のしとねにし、いたるところを散策しました。

こうした散策で、入場料のいらないあらゆるところ——小さなお寺、神社、公園にいきましたが、なかでも最高の散策は、近隣の素敵なお通りを歩くことだったのです。

## 京都の借景と人々

私たちは、大文字山西斜面の高台にある古い二部屋の茶室を借りるために、貯えをすべて敷金に払いました。小さなお風呂もありませんでしたが、お気に入りの入浴スポットは、わが家のすぐ隣の山の小川でした。それは、小さな神社の背後にあるじつに美しい、六尺もの滝で、何世紀もまえにそこで、うまいとはいえないが幾つかの詩を書きしるした、有名なサムライが身を浄めたものでした。わが家の非伝統的なひとつのある、床の間の脇の二段のガスベクトは、西側の壁のなかほどにある、



（撮影/John Einerson）

ラスの窓でした。その眺めは魔術的でした。家の下には、小さな小川の泡立つ銀のストライプが竹や椿、ふじがからまつたアーチの影を映していました。そのうえ、蔓の屋根のつづく街の端は、夕方の薄霧のなかに広がったような温かいオレンジの光に輝いていました。

さらにまた、吉田山の林のワイルドな緑の熱気、そのむこうには西山の山の端と果てしない星の輝きです。借景の効果は複合的で愛らしく、いまでも、この街の大好きな思い出のひとつとして残っています。

魔法の窓はまた、身近な近隣社会と私たちの散策のほとんどの光景を見おろしていました。哲学の道、鹿ヶ谷、錦林、神楽岡——なんて素敵なもの、なんと美しい家々、なんと華麗な花の小径だろう、なんという望むべき幸せなところだろうと思いました。企業が京都の街をおさえる前のあの頃、街は住民が定義していました。どのお店も家も、街角の飲み屋も、温かい個人的な接触をもつっていました。それらは時には質朴で、時にはエレガントで、時にはまったく奇妙でした。

しかし、いつも、これらの場所では人間的な香りを味わうことができました。建物のデザインや装飾は大いに個性的でしたが、地域や近隣の協力をおおうフィーリングは友好的で強力でした。多くの面で、感覚的に飢えていたこの数か月は私の京都への恋愛の頂点でした。街はもつと親密で無垢でしたし、たしかに手がつけられないままでした。路地裏で出会った人々は皆、京都をとても誇りにし、その歴史と美を誇りにしているようでしたし、ここに住むことが幸せであるように見えました。

### なぜ、まち壊しが

その後の年月に目撃した大仕掛けのまち壊しには、それゆえに、びっくりし、当惑しもしました。

京都はこの三〇年間に毎年、二〇〇〇軒もの古い木の家や建物を、失ってきました。それは、最初に私たちが路地を散策した頃から七万の家々が、木と紙、それらを大切にした世代の七万もの小さな詩が壊されたのです。

この悲劇をなにが引き起こしたのか、私たちは不思議なことでした。どのようにして、住民はその愛らしくささやく家をあきらめて、コンクリートの箱に住むことができたのでしょうか。いまや、私たちはそれを理解したいと思いました。

この破壊の一部は、政治的な破壊です。巨大ゼネコンが消防行政を酒食で接待し、じきに京都は、下町のどこでも木造の建築を妨げる防火規制をつくったのです。それで、かつては世界最良の大工による国際的な宝物と呼ばれた京都は「いまやセメントと有毒な新材の街」になっているのです。

この破壊の一部は、経済的な破壊です。税務署は、古い家とその近隣を維持するための相続税の緩和を拒絶しました。

実際の評価額が天を突くまでに上ったとき、こうした税金は支払い不能となり、土地はどんどんと企業の手に落ちました。企業の手は危険な手です。なぜなら、企業というものは、人間的な温かさを感じる心とか、手づくりの美しさを見る眼とか、建物の思い出や歴史を大切にする魂をもっていないからです。企業はもっぱら、数字と利益に関心があり、したがって、企業の手は、美しいものを創造するよりもこわすほうが良いことなのです。かれらは相続税の心配がありません。企業の手は土地を永久に悪用することがで

(撮影/John Einerson)

きります。企業は死なないからです。

そして、破壊の一部は、文化的な破壊です。企業  
スボンサーにリードされて、マスマディアは、無駄・  
「もつたらない」という昔ながらの価値を拒絶し、使

い捨てのライフ・スタイルに新しいイデオロギーと  
して慣れるようにと人々に催眠術をかけました。

私たちもここで、フランス・ベッドをもつことは  
「スタイリッシュ」だという理由で、居住空間の半  
分を幸せそうに犠牲にする人たちに出会いました。  
わたしたちは、驚くほど穩健な、知性ある人たちが、  
プラスティックの家具が「スタイリッシュ」だとい  
う理由で、豪華で古美術的な水屋やタンスを路上に  
投げ捨てるのを見ました。

したがって、プラスティックの洋風ブレハブが「ス  
タイリッシュ」だと宣伝されているために、人々が  
美しい手製の家に涙を流すよう教えられるべきだと  
いうことは、おそらく驚くべきことでもないのでし  
ょ。

### 「しかたがない」ではなく「しかたがあり」

しかし、このことは私たちを驚かせました。わが伝統的な大工の友人たち（かれらは高度の  
技術をもつた職人として自分の仕事が瞬く間になくなるのに遭遇しました）が安価な、大量  
生産の労働者に取って代わられたこともまた、驚くべきことでした。友たちももちろん、愛  
すべき近隣社会の喪失にきわめて圧迫されていましたが、この変化の背後には大きな力がある  
ことを見て取つて、「しかたがない」というのでした。

幸か不幸か、私たちは外人として自國での経験から、「しかたがあり」ということを知つて  
おり、また、こうした破壊のほとんどすべてが防がれてきたことを知つていきました。

ヨーロッパや合衆国の大い街でさえ、そこを訪れたことのある人に聞いてみてください。大  
企業はやはり、こうした街に攻撃を仕掛けようとしました。しかし、行政が本当に民主的で、  
住民は街をコントロールして、その基本的な美しさを維持することができるのです。文化とコ  
ミュニティを守る市民のもつとも強力な道具は、自分たちの生活に影響する市の政策の決定に  
ついて直接投票を地域住民に与える住民投票権です。

これは他の国々では「ノーマルな民主主義」と考えられていますが、日本にはこうした権利  
はまだどこにも存在していません。地域の問題に遭遇したとき、その市民は条例制定請求を  
試みることができますが、これは住民陳情権以上のものではありません。それは、地方自治と  
その環境をあまりにも大きい企業の影響から守る、眞の市民立法権の力はもつていてないので  
す。最終的な決定権がごく少数の人たちの手にあるならば、そのサービスを買うことは容易ですし、  
効果的です。しかし、最終的な決定権が幾千もの市民の手に確保されているならば、かれらの  
すべてを祇園に連れてていき、新しい高速道路やゴミ処理場や高層ホテルのための許認可を得る  
ことは、かなり困難なことでしょう。

京都はこの三〇年間に多くのものを——美しい建物や街並み、芸術的な近隣社会を失つてき  
ましたが、まだ多くの宝物が残されています。京都市民が残っているものを保護しようとする  
なら、かれらにも住民投票権が必要となるでしょう。  
そして、まさしくいま、おそらく日本の歴史のうえではじめて、それを得る現実の機会があ  
るのです。



(撮影/John Einerson)

季刊

# ひろば

No.116

1998.11

「教育運動」第3世紀

京都の教育

アノ うたってほんの

特集

## これから勉強はどうなる

教育課程審議会答申 子どもたちの声はとどいたか 山崎 雄介

取材・検証 「総合的な学習」御所南小学校はいま

- シリーズ外国人の見た京都のまち・景観
- 「しかたがない」をもうやめよう・京都ラブストーリー デーヴィット・クビアク